

ら は た 探訪 歴史 クラブ 其の48

TAHARA
History Inquiry
Club

児童を見守る『金次郎さん』

かつては、小学校の校門周辺や校舎に入る通路に必ずあった「金次郎さん」の像。今では地味な存在になつてしまいました。

二宮金次郎（尊徳・1787～1856）は、現在の小田原市の

農家の長男として生まれました。14歳のとき父が、16歳のとき母が亡くなり、伯父の家へ預けられます。そのため早朝から深夜まで一生懸命働き、わずかな時間も惜しまず勉強しました。毎晩独学で勉強に励む金次郎は、夜の読書に明かりが必要なた

め、荒地に菜種を植え、菜種油を得て火を灯しました。また、捨てられた苗を拾い荒地を開墾したところに植え、秋には一俵もの物を収穫し、「小を積んで大と為す」を学びます。その後、小田原藩家老服部家の家政を再建し、さらに各藩、旗本などの財政再建、領民救済、農村の復興事業を行いました。

明治時代には勤勉の象徴として修身教育に取り上げられ、小学唱歌にも歌われました。国定教科書に、薪を背負いながら勉強に励む姿が掲載され、模範的児童の代表として初等教育の世界に知れ渡ります。

こうした時代の流れと、地場産業の振興を望む石材加工・鑄造・セメント業者の商業的戦略がうまくかみ



田原北部小にあった銅製の「金次郎さん」



若戸小の「金次郎さん」

合い、大正末から戦前にかけて日本全国の尋常小学校、高等小学校に石・銅・セメントなどで製作された二宮金次郎像が次々と設置されていきました。このように特定の人物像が全国一律に設置されるのは例がありませんでした。薪を背負い本を読む、というポーズがわかりやすく親しみやすかったからに違いありません。

しかし、像のように薪を背負ったまま本を読んで歩いたという事実が確認できないこと、児童が像の真似をするとう交通安全上問題があることから、70年代以降、校舎の建て替えなどに合わせ徐々に撤去され、全国的に像の数は減少傾向にあります。

渥美半島では像の設置が盛んになる以前、農民の勤勉、儉約といった金次郎の教えを普及する「三遠農学社渥美支社」が明治26年に設立されるなど、「金次郎さん」は尊敬すべき人物として親しまれてきました。

一番上の写真は昭和10年に撮られ

た田原北部小学校（現童浦小）の像です。若戸小学校に残る像は昭和15年のセメント製で、田原市で盛んだったセメント産業を偲ぶ素材です。田原南部小学校に残るものは石製です。若戸小の像はすらつとした美少年ですが、南部小の像はいかにも子供らしい体型と笑顔が魅力です。



田原南部小の「金次郎さん」

金次郎さんが自ら体得した教えである、勤労儉約しながら働くこと（「分度（生産力に応じた消費）」「推譲（富の還元）」は、各地の再建に役立ちました。戦後の復興を支えた勤勉な国民のヒーローでした。このような現代だからこそ、今一度「金次郎さん」の姿を見て、その教えを見直してみませんか。（増山）

生涯学習課 ☎ 23局 35331

【お詫びと訂正】前号、赤羽根で古銭が発見された年は、正しくは延享2年（1745）でした。訂正しお詫び申し上げます。